Featured Artist

邦楽 明日への扉

常磐津千寿太夫＆都了中

2023年から始まったシリーズ「邦楽 明日への扉」、今年は常磐津節の常磐津千寿太夫と一中節の都了中にスポットをあてます。

常磐津節と一中節は三味線を伴奏に語る「浄瑠璃」で、常磐津節は初世常磐津文字太夫（1709～1781）が江戸で、一中節は初世都太夫一中（1650～1724）が京都で創始。300年以上の歴史ある語りもの音楽です。その浄瑠璃方として次世代を担うふたりに公演の聴きどころや意気込みなどを伺いました。

紀尾井小ホールロビーにて

セリフが特徴、常磐津節

「歌舞伎と密接につながってきた常磐津節は、一中節とは異なりセリフがあり、より物語性が強いのが特徴です」と常磐津千寿太夫。今公演では、曲調の異なる3曲を披露します。

幕開けは、初代文字太夫が常磐津節を興して最初に発表した《老松》。謡曲《老松》の一部を取り出し一曲とした短いが格調高い祝儀物です。続いて千太郎と廓を抜け出した遊女・小夜衣の道行で《小夜衣》。そして常磐津節を代表する大曲《関の扉 下》。一面雪景色のなか桜が満開の逢坂の関を舞台に、天下を狙う大友黒主（関兵衛）と、それを阻止しようとする小町桜の精（墨染）が争うさまを描きます。大友黒主を千寿太夫が、小町桜の精を常磐津松希太夫が演じます。

「関兵衛が酔っ払ってでてくる場面や、関兵衛と墨染のやりとり、最後の立ち回りの激しさなど、一曲のなかで場面がさまざまに変わり、曲調が変化する聴きどころ満載でやりがいのある曲です。歌舞伎の舞台でタテ三味線を務められる常磐津菊寿郎さんに弾いていただきチャレンジします」

若手実力派として全国で活動する千寿太夫ですが、幼少のころに稽古をした記憶がほとんどないと言います。「学校から帰ると父（常磐津光勢太夫）がお稽古をしていて、周りのお父さんたちとは違うなあと不思議に思っていました。常磐津をしなさいと言われたことは一度もありません。

小学校の時に、常磐津駒太夫師匠に教えていただくことになりました。お稽古のあとには食事や野球に連れていっていただいたりして、通うのが楽しみでした。中学校1年生で常磐津千寿太夫の名前をいただきました。それからお休みをはさみ、20歳のころ、そういえば常磐津の名前を持っているし、たくさんあるレコードの中には祖父常磐津千東勢太夫の名前もあるし、お芝居や華やかな舞台に出られるかもと、常磐津初勢太夫師匠のもとで再びお稽古を始めました」

常磐津千寿太夫

イロ詞に注目、一中節

一中節の特徴を都了中は次のように話します。

「たとえば一中節では、セリフのような表現を詞と言います。その詞に抑揚をつけて言う『イロ詞』が多用されていて、魅力的な節がついています。それを聴くと一中節だとわかります。ほかの三味線音楽に比べて、音数がそんなに多くなく、淡々と語っていくスタイルですので、初めて聴かれる方にとっては退屈に感じられるかもしれませんが、その一音一音に情景や思いが込められています。そこを味わっていただければ嬉しいです」

都了中

今公演では比較的わかりやすい内容のものを選曲したといいます。京都の辰巳（東南）にあたる宇治地方の風景や情景を語る《辰巳の四季》、当時の若き歌舞伎役者の名前を並べ、最後に名馬が集まってくる情景を語る《都若衆万歳》、能からとった《石橋》の3曲です。

「来年は、初代一中没後300年ということもあり、初代作曲の《辰巳の四季》と《都若衆万歳》を選びました。《辰巳の四季》の後半に〽変わらぬ御代は万々歳という歌詞があり、〽四海波風静かにて治まる国こそ久しけれ と終わります。これは、それまで語ってきた何でもない日常が続くこと、世界の海が穏やかで平和が続くことを願う意図が初代にあったのではないかと思います。また《都若衆万歳》でも、〽万々歳とぞ祝しける と終わりますが、ひとりの力では成し遂げられないけれど多くの仲間がいる、優秀な馬が集まってきてあなたが繁栄しますようにと伝えています」

子どものころ、気がついたらお稽古してもらっていたという了中。「小さなころは毎日お稽古するのではなく、父（都一中）が主催するおさらい会が年一回あるので、その数ヵ月前から、じゃあやろうかという感じでした。声を出すことが好きでしたので、アニメの歌を歌うのと同じような感覚で稽古をしていました。詞の意味はわかりませんでしたが…。お稽古することや、跡を継ぐことが本当に嫌だったらやらなくてもいいと言われましたが、やらなくてもいいと言われるとね～（笑）」

歌舞伎とともに歩んできた常磐津節と、江戸時代には稽古本がない家はないといわれるほど一世を風靡したという一中節。ともに現代人には遠い存在の音楽となってしまいました。しかし、そこには今も変わらない自然を愛でる気持ちや人情、愛憎、平和を願う心などが詰まっています。同じ浄瑠璃といっても常磐津節と一中節ではその表現方法は異なり、どちらも中棹三味線を使用しますが響きも異なります。

千寿太夫と了中は言います。「ふたつの公演をお聴きいただき、違いを感じてもらえれば嬉しいです。最初は言葉もわかりにくく、とっつきにくく感じられるかもしれませんが、音や舞台の様子から何かは感じられると思います。難しいことは考えず、まずはお聴きいただきたいです」

取材・文／織田麻有佐（邦楽記者）

邦楽 明日への扉

協力:森永製菓株式会社

第3回 常磐津千寿太夫

2024 2/12 月・祝 14:00

［演目］

「**老松**」
常磐津千寿太夫、常磐津松希太夫、常磐津佐知太夫（浄瑠璃）
常磐津菊与志郎、常磐津美寿郎、常磐津紫十郎（三味線）

「**小夜衣**」
常磐津千寿太夫、常磐津初應太夫、常磐津松希太夫（浄瑠璃）
岸澤式松、常磐津祐二郎、岸澤満佐志（三味線）

「**関の扉 下**」
常磐津千寿太夫、常磐津松希太夫、
常磐津初應太夫、常磐津佐知太夫（浄瑠璃）
常磐津菊寿郎、常磐津都史、岸澤満佐志（三味線）

第4回 都了中

2024 3/24 日 14:00

［演目］

「**辰巳の四季**」
都了中（浄瑠璃）
都一翠（三味線）

「**都若衆万歳**」
都了中（浄瑠璃）
都一志朗、都一千（三味線）

「**石橋**」
都了中（浄瑠璃）
都一中（三味線）［特別出演］
都楽中（上調子）

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。